

## 自閉症理解のためにー 1. 視覚パネル教材作成の試み

### A Report on Understanding the Autism (1)

田川 元康  
Tagawa Motoyasu  
(和歌山大学名誉教授)

山瀧 智美  
Yamatagi Tomomi  
(東高殿幼稚園教諭)

山田 彩  
Yamada Aya  
(めぐみ幼稚園教諭)

#### I. 研究の目的

障害児に対する意識や態度の研究には、古くは伊藤隆二と田川元康(1967)、江藤 真と山口洋史(1969)、三沢義一(1969)をはじめ、これまでにいくつかの業績が公表されている。そして、これらの研究の多くは、接触(contact)の経験や知識(information)の吸収によって、障害児に対する健常児(者)の意識や態度が、受容的あるいは好意的方向へ変化していくという結果を述べている。

1970年代に入って、わが国においても統合教育や交流教育の実践が行われるようになり、養護学校の義務制が施行されて以来、統合教育や交流教育の実践の増加に伴う健常児の態度の変容に関する議論や研究が盛んになってきている。田中敏哲他(1973)は、通常学級の児童と障害児学級の軽度および中度知的障害児の1年にわたる交流教育の事例を観察法により分析した結果、交流により知的障害児に対する健常児たちの理解が深まるとともに、現実場面における受容的行動が多く見られるようになった。しかも、以前は劣者とみなしていた知的障害児を、自分と同じレベルで見ようとする意識が生じたことを見出している。木船憲幸(1986)は、知的障害児に対する健常児の態度と交流経験との関係について研究し、障害児の能力や性格について好意的イメージを持つ者は受容的な態度をとる傾向が見られたと述べている。

接触経験の内容や方法についても検討が加えられるようになり、身体障害者(児)に対する態度に及ぼす影響について、Donaldson(1980)は、計画的に組織化された接触方法を用いた5つの研究と、特別な方法を使っていない8つの研究を比較した結果、計画的接触の場合はすべて好意的変化を起したが、そうでない場合は3つの研究が好意的変化を、3つが非好意的変化を、そして、2つが変化を見なかつたと述べている。

また河内清彦(1990)は、身体障害を持つ人々に対する学生および教師の態度を形成する要因のうち、接

触経験の影響を取り扱った実証的な89の研究結果を分析している。すなわち、学生の接触経験の内容を、「態度を肯定的に変化させるように計画されたプログラムにしたがって、一定期間、指導者の下で、組織的に行う障害者との接触」のあった計画的接触と「学校内などで、障害者と健常者が単に共存するか、あるいは過去のある不特定の場面で障害者と偶然に出会うことによって起こる接触」の非計画的接触に分類する。そして、接触経験の影響を、好意的影響の有るものと無いものに分類している。その結果、計画的あるいは組織的な準備をしない接触に比べ、計画的接触は身体障害者(児)に対する態度に好意的影響を及ぼすと報告している。

接触体験の効果の持続性について、徳田克巳(1990b)は、短期大学女子学生に盲人の手引きの方法の基本を講義した後、実際に15分間手引きの実習をさせ、その前後と、2ヶ月後・5ヶ月後に視覚障害者に対する多次元の態度尺度を用いて測定した結果、一部の次元については実習直後には顕著な改善が示されたが、全般に時間経過とともに実習前の態度の方向(非好意的な態度の方向)に戻り、持続性が困難であることが明らかになったと述べている。

こうした先行研究を概観するにつけても、従来からも指摘されているように障害の理解のためには接触(contact)の体験と正確な知識(information)の2つの要因が必要であるとする考えが、また、直接的な理解を深めるための教材・教具の開発や作成などが積極的に行なわれ必要がある。

#### II. 研究の内容

すでに江田裕介ら(1995)によって理解啓発のための「紙芝居教材」が作成され実践に供されているが、われわれは特に「自閉症の理解」に焦点を絞り、(1)健常児用のいわゆる「視覚教材パネル」を作成した。(2)その教材を用いて授業を実施し、授業の前後に調

査を行なって、健常児たちの自閉症児に対する態度の変化をみた。その場合、調査対象児に、日常障害児（自閉症児）との接触体験は殆んどない学校の児童と、平常から障害児（自閉症児）が在籍にいて、接触体験の比較的豊富な学校の児童を選び、両者の比較検討を行なった。

本稿ではまず、自閉症の障害特性を健常児童に理解させるべく工夫して作成した「視覚パネル教材」を紹介したい。

#### 1) 視覚パネル教材の構成

自閉症児亮太を主人公にして、自閉症の特性の理解と対処法を教えるための、12場面からなる絵画図版を作成した。各場面の概要は次頁の資料の通りである。

#### 2) 視覚パネル教材の台本

各図版を見せながら、クラス単位で対象児童に話して聞かせるための台本である（Nはナレーション、ボラはボランティアの略）。

#### 第①図版

N : 亮太君は小学一年生の男の子。  
今日はこれからボランティアのお兄さんと一緒に大好きな電車に乗っておでかけします。  
あ！亮太君はいつものカードを首からぶらさげていますね。  
ボラ : それじゃあ、行ってきます！！

#### 第②図版

N : しばらく歩いて行くと駅が見えてきました。  
お兄さんは亮太君を連れて切符売り場へ向かいました。  
ところが・・・  
ボラ : 「あれっ？」  
N : な、なんと亮太君がいません！！  
さあ大変です！！お兄さんは真っ青になりました。  
ボラ : 「どうしよう」  
N : その頃亮太君は・・・

#### 第③図版

N : 駅のホームに嬉しそうに目を輝かせながら立っています。  
次から次へやってくる電車を見て亮太君はご機嫌です。  
亮太 : 次に1番ホームに参ります電車は、13時3分発、三条行きの急行です。  
N : なんと亮太君はアナウンスを大きな声で言い始めました！！  
一つも間違えずに言う亮太君を周りの人達が

振り返っては通り過ぎていきます。  
しかし、ニコニコしている亮太君をだれも迷子だと思いません。

亮太 : 次に2番ホームに参ります電車は、13時11分発、淀屋橋行きの特急です。  
N : 亮太君の大好きな特急はお客さんを乗せるとすぐに出発しました。

#### 第④図版

N : 亮太君はホームに座り込んでしまいました。  
その様子を見ていた、五年生の仲良し4人組が亮太君に声を掛けました。  
一郎 : どうしたの？こんな所にすわりこんじゃって。1人なの？  
N : 一郎君に聞かれても亮太君は何も答えません。手をヒラヒラさせてボーっとしています。  
一郎 : なんだ？話せないのか？  
亮太 : なんだ？話せないのか？  
N : 亮太君は一郎君たちが何を聞いても同じ言葉を繰り返してニコニコするばかりです。  
和之 : なんだ？この子。さっき大きな声で、話していたのに。  
由美子 : きっと迷子になって訳がわからなくなっちゃっているのよ。  
茜 : そうだ！！もしかして、案内所に誰かが探しに来ているかもしれないわ！！  
一郎 : そうだね。案内所に行ってみようか  
N : こうして4人は亮太君を案内所に連れて行くことにしました。

#### 第⑤図版

由美子 : すみませーん。迷子がいたので連れてきました。  
駅員 : ああ、ありがとう。今日はお客さんが一杯だからなあ。  
さあ、もう心配しなくていいぞ。きっとすぐに迎えに来てくれるからね。  
それで一体この子はどこにいたんだい??  
一郎 : 1番ホームだよ。ホームに座り込んでボーっとしながら手をひらひらさせてた。  
話しかけても答えてくれないし・・・。駅のアナウンスはずっと話してたのに・・・。  
和之 : そうなんだよ！！電車がくると、ホームにアナウンスが流れるでしょ。この子、それを一つも間違えず全部言っていたんだよ！！  
僕だったらあんなに覚えられないよ。  
駅員 : へえ、それはすごいなあ。やるなあ、きみ！！  
N : 駅員さんは感心して、亮太君の頭をなでました。



資料 視覚パネル教材

自閉症の特長として次の項目を取り入れた。



第①場面

この場面ではジグ（IDカード）のことを絵の中に描いた。このカードには名前、住所、連絡先、自閉症である事が書いてある。



第④場面

通りかかった小学生が主人公に声をかける場面。この場面では常動行動とオウム返しを取り入れた。この具体的な行動として、手をヒラヒラさせ、ポーっとする事、オウム返しを取り入れた。



第②場面

主人公（自閉症児）が迷子になるという場面である。ここでは、興味のある事が目に入ると、それしか見えなくなることを取り入れた。これは自閉症児に関わらず、健常児でも言えることである。



第⑤場面

案内所に連れて行く場面である。ここでは、①場面でも出てきたIDカードの事と、自閉症に対する間違った認識について取り入れた。



第③場面

主人公がホームで電車を見ているという場面である。この場面では、興味のあることに対して、優れた能力を発揮するという特徴を取り入れた。具体的には、「電車の時刻を全て暗記する」という例を出した。



第⑥場面

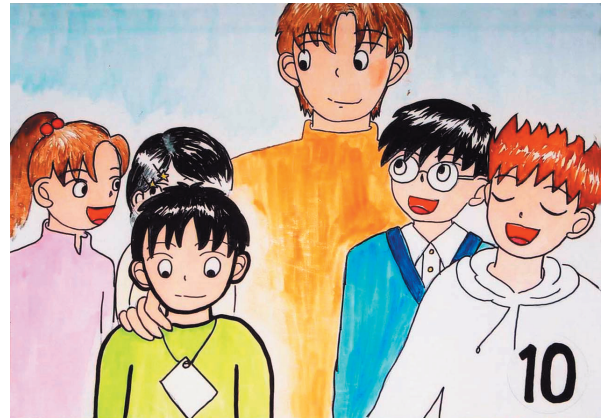
みんなが主人公にたくさん質問をする場面。この場面では、自閉症に対しての誤った認識を持った人の対応を描いた。





第⑦場面

たくさんのことを、一度に聞くことができなくてパニックをおこしてしまう場面である。



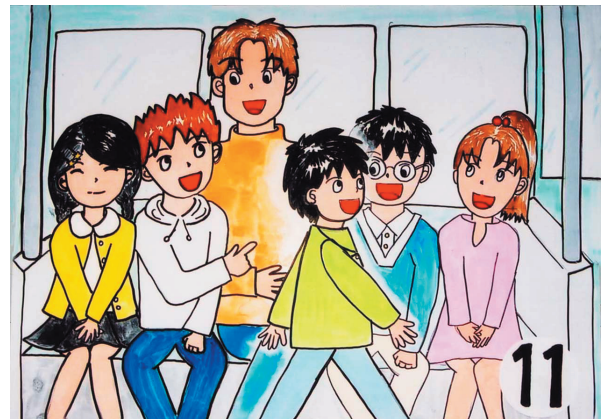
第⑩場面

特に特徴として取り入れた項目はないが、①場面と同様に、自閉症であることを記したIDカードを首から下げた。



第⑧場面

パニックをおこしてしまった主人公に簡単な言葉と絵や文字を使って優しくはっきりとこれからの予定を伝える場面である。先の見とおしがたつと落ち着くという自閉症児の特徴をとり入れた。



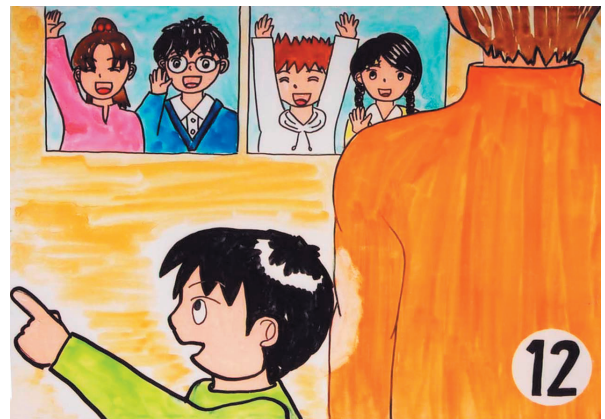
第⑪場面

⑨場面で駅員さんに説明した自閉症の障害について、もう一度わかりやすく説明する場面。また、自閉症児に出会ったときはどうしたらいいのかも説明した。



第⑨場面

- ボランティアのお兄さんが駅員さんに
1. 自閉症は生まれつきの脳の病気であること
  2. 自閉症は完全に治ることはないこと
  3. たくさんのことを一度に聞くことができないこと
  4. 簡単に短い言葉は理解しやすいこと
- などの自閉症の障害について説明する場面



第⑫場面

お別れのシーン。  
自閉症である主人公は、「ばいばい」と別れを告げているみんなとは視線が合っていない。これは、人と視線を合わせることができないという特徴をもった自閉症児もいるということを表現した。



亮太君はじーっと窓の外をみたまます。  
その時駅員さんは亮太君の首にぶら下がっているカードに気付きました。  
そのカードには亮太君の名前と住所と電話番号、そして亮太君が『自閉症』だということが書いてありました。

駅員 : 自閉症か・・・。  
一郎 : 駅員さん、自閉症って何？  
駅員 : うーん、詳しくは知らないけれど、自分から話しかけるのがちょっと苦手な人で遊ぶのが好きな子のことだと思うよ。  
たぶん恥ずかしがりやさんなんだよ。  
迷子になって寂しいと思うから、みんないっぱい話し掛けてあげてね。

### 第⑥図版

和之 : うん、わかったよ！！ねえ亮太君、何年生なの？  
亮太 : 亮太、電車乗ります。行きます。  
和之 : あれ？おかしいなあ。  
ねえねえ、亮太君何年生なの？？  
(さっきよりも大きな声で)  
亮太 : 電車乗ります。早く行きます。  
茜 : ねえねえ、亮太君、私たちは4人で来たんだけど、亮太君は誰と来たの？  
亮太 : 亮太君は誰と来たの？  
N : 亮太君はみんなに質問されればされるほど、だんだん落ち着かなくなってきました。  
そして目に見えて機嫌が悪くなってきました。  
一郎 : ねえ、どうして亮太君は答えてくれないんだろう？  
茜 : 緊張してるのかなあ？  
由美子 : 恥ずかしがってるんじゃない？  
和之 : 俺たちのこときらいなのかなあ。  
N : そんな事を話している間にも、亮太君の機嫌はどんどん悪くなっていきます。  
案内所はいろんな音と声で一杯です。

### 第⑦図版

N : その時、亮太君は突然自分の耳をふさぎました。  
一郎 : どうしたの、亮太君！！耳が痛いのか？  
由美子 : 大変！！寂しすぎて、混乱しちゃったのかしら。  
亮太君、大丈夫だよ。安心して！！  
N : しかし、亮太君は安心するどころか、ますます混乱し、とうとう我慢できなくなった亮太君は大きな声をだしながら机をどんどん叩き始めました。

一郎 : 亮太君、やめなよ。落ち着いて！！大丈夫だから！！

N : 一郎が止めようとしても、亮太君は机を叩くのをやめません。  
それどころか今度は自分の頭を叩き始めました。

由美子 : キャー！！やめて、亮太君！！怪我してしまうよ！！

茜 : 駅員さん、大変だよ！！誰か助けてえ！！

N : 駅員さんが急いでやってきて亮太君を止めようとしました。

そこへボランティアのお兄さんが駆け込んできました。

### 第⑧図版

ボラ : 亮太君、今は駅にいます。これから14時7分発の特急に乗ります。  
天満橋駅で降ります。そのあと散歩します。  
N : ボランティアのお兄さんが今いる所とこれからの予定をゆっくりはっきりと亮太君に伝えると、亮太君はなんとか落ち着きを取り戻しました。  
ボラ : 僕は亮太くんのボランティアをしているものです。  
切符を買おうと少し目を離れた際に亮太君を見失ってしまったのです。  
ご迷惑をおかけしました。  
駅員 : いえいえ。みつかってほんとによかったですね。  
ホームの真ん中に1人で座り込んでいたのを、この子達がみつけて連れてきてくれたんですよ。  
ボラ : そうなんですか！！みんなありがとう。  
さっきの亮太君にはびっくりしたでしょ？  
亮太君は自閉症なんだ。  
亮太君はみんなに自分の思ってる事をうまく伝える事が苦手なんだよ。  
今どこにいるのか、これからどうなるのかがわからないと、みんなも不安になるでしょ？  
不安をうまく表せなくて、パニックを起こして自分で自分の頭を叩きちゃったんだ。

### 第⑨図版

子ども達 : へえ、そうなんだあ。  
ボラ : 駅員さん、自閉症のことは知っておられますか？  
駅員 : えっ？いやあ、聞いたことはあるんですがねえ。  
なにか、親の育て方のせいで自分の世界に閉じこもってしまうような病気・・・というよ

うなイメージだけでして・・・。

ボラ : そうですか。  
自閉症に対してそのようなイメージをもたれている人は少なくないんです。  
しかし親の育て方が悪かったので自閉症になったというのは間違ったイメージなんですよ。

駅員 : はあ、そうですか。といますと？

ボラ : はい。  
自閉症とは生まれつきの脳の障害です。完全に治ると言う事はありません。  
しかし、自閉症の子も成長する力をもっているの、自分や周りの人次第で、少しずつ成長して行きます。  
自閉症の子は、耳から入ってきたたくさんの言葉を一度に頭の中で整理するのが苦手です。  
それで言われたとおりに行動できなかつたり、質問に答えられかたつたりするのです。  
でも短い言葉や具体的な言葉は理解しやすいです。

駅員 : そうなんですか。僕はたくさん話しかけたほうがいいのかと思いこんでいましたよ。

ボラ : さっき僕が来た時に、亮太君が暴れてしまっていたでしょ？  
あれは自分の周りがどんな状態なのかわからなくて、不安になって混乱してしまったんです。

駅員 : なるほど。そんな時にはどうしたらいいんですか？

ボラ : はい。自閉症児のほとんどは「聞く」よりも「見る」ほうが得意なんです。  
だから短く簡単に話すか、さっき僕が亮太君に見せていたカードのように、絵や文字を書いたものを見せたりします。

駅員 : なるほど。初めて知りました。僕は大きな勘違いをしていたようですね。

ボラ : いえいえ。それよりも亮太君が見つかってよかったです。  
本当にありがとうございました。

#### 第⑩図版

ボラ : 君達も本当にありがとう。

茜 : うん。でもさっき言ってた自閉症ってなんなの？  
難しくてよくわからなかったんだけど・・・。

ボラ : うーん、そうだなあ。  
もう少しわかりやすく話してあげたいけど、僕らは14時7分発の電車に乗らないといけないんだよ。

和之 : お兄さん！！それなら僕達と一緒にだよ！！  
みんなと一緒にいこうよ！！

ボラ : よし。じゃあ電車の中で話そうか。  
みんな : やったー！！

#### 第⑪図版

ボラ : みんな、人の動きは全部脳が命令しているって知っているかな。  
自閉症ってね、脳の、話すとか聞くとかに感じるとかの部分に生まれつき傷があるんだ。  
もしキミ達が言葉も分からない外国に行つて、突然知らない人に、外国の言葉でどんどん話しかけられたらどうする？

茜 : うーん。きっとわけが分からないかも。

ボラ : そうだねえ。身振りとか、絵を書いてもらったりしたらどうかな？  
分かりやすくなるよね。  
こんな風に亮太君にとって絵が言葉の代わりになっているんだ。

和之 : じゃあ、大きな声で外国の言葉を話しかけられたらもっと怖いよね。

ボラ : そうだね。

茜 : じゃあ、さっきホームにいた時に手をひらひらさせていたのはなんで？

ボラ : それは自分を落ち着かせるためにやっているんだよ。  
亮太君にとっては繰り返しが安心するんだ。  
みんなの深呼吸と同じだね。

由美子 : じゃあ、なんで亮太君はホームに流れるアナウンスの声を言い方で間違えずにいえちゃうの？

ボラ : 亮太君は自閉症だから苦手な事も多いけど、自閉症だからこそ得意な事もたくさんあるんだよ！！  
亮太君の場合は電車が大好きだから、電車の時刻を一度覚えると、なかなか忘れないんだよ。  
あとはいつもニコニコしていて怒らないのも亮太君のいい所だね。  
うそもつかない正直者なんだよ。

茜 : 亮太君とお話するとき、どうすればいいの？

ボラ : 優しい言葉でゆっくりと短く伝えてあげるといいよ。  
もしそれで伝わらなかつたら、文字や絵など目で見て分かるものを使ってみるのもいいね。  
僕はよくいろんなものを写真にとってカードにしたものを使つたりしているよ。

子ども : へえ、そうなんだ。

ボラ : 足の不自由な人には車椅子、目が悪い人はメ



ガネをかけるし、耳が不自由な人は手話でお話しするし、みんなだって高い所にほしいものがあつたら踏み台を使って取るでしょ？その人の生活を便利にする工夫が色々あるよね。

亮太君にとってメガネや踏み台に当たるものは『みんなの親切な接し方』や、さっきの写真カードなんだ。亮太君は『誰が』『いつ』『何を』『どこで』『終わり』が分かりにくいんだ。だからみんなに分かりやすく教えてもらえると安心するんだよ。

誰にだって、苦手な事だってあるし、得意な事だってある。

みんなと一緒にんだよ。

N : そうやって話しているうちにお兄さんと亮太君が降りる駅が近づいてきました。

### 第⑫図版

ボラ : さあ、亮太君、降りよう。みんな今日は本当に色々ありがとう！！

もし、自閉症の子に会ったら今日言った事を参考にしてみてね。

和之 : 僕達こそ会えてよかったです。色々教えてくれてありがとうございます！！

ボラ : じゃ、みんな気をつけてね。さようなら。

N : そして亮太くんとお兄さんは電車から降り、子ども達4人はそれを見送りました。2人を見送った4人は電車の中で今日の出来事を話しています。

一郎 : 僕、自閉症って今日初めて聞いたよ！！自閉症っていても僕らと同じだね。

僕らだって苦手な事がいっぱいあるしね。

和之はまださかあがりもできないしな(笑)

和之 : うっ、うるさいなー。僕だって逆上がりの『ほじょいた』があればできるさ！！

由美子 : 亮太君も和之君みたいに「少し手伝ってもらったら、できるさ！」って思っているんじゃないかしら。

茜 : そうね。私、今度もし亮太君の様な自閉症の子にあつたら、今日お兄さんに聞いてみた事を実行しようと思うの。

N : それを聞いたみんなもそうしようと心に決めました。

そしていつかまた亮太君に会えたらいいなと思いました。

3) 2つの小学校児童を対象にして、以上の視覚教材パネルを用いて読み聞かせを行なった前後に、自閉症に対する知識・意識に関する調査を実施し、事前・事後の変化を調べた。

それらの結果については次報で報告したい。

### 文 献

Cloerkes, G. (1979) : Determinants of attitudes and behavior toward physically disabled persons.

Results of a secondary analysis., International Journal of Rehabilitation research, 2(3), 382-383.

Donaldson, J. (1980) : Changing attitudes toward handicapped persons : A review and analysis of research., Exceptional Children, 46(7), 505-514.

遠藤 真・山口洋史 (1969) : 精神薄弱児に対する態度の研究, 特殊教育学研究, 6(2), 19 - 27.

English, W.R. (1971) : Correlates of stigma towards physically disabled persons., Research and Practive Review, 2(4), 1-17.

伊藤隆二・田川元康 (1967) : 心身障害児に対する社会人の態度(偏見)に関する研究, 特殊教育学研究, 5(1), 1 - 12.

位頭義仁 (1982) : 交流教育の実際, 教育出版.

河内清彦 (1990) : 学生および教師の視覚障害者観, 文化書房白文社.

木船憲幸 (1986) : 精神薄弱児に対する普通児の態度と交流経験との関係, 特殊教育学研究, 24(1), 11 - 19.

三沢義一 (1969) : 身体障害者(児)に対する一般人の態度について, 三重大学教育学部研究紀要, 42, 43 - 58.

宮本茂雄・細村 夫 (1984) : 交流教育の理論と実際, 学苑社.

田中敏哲・熊田 全・齊藤光司 (1973) : 普通児との交流, 精神薄弱児研究, 177, 62 - 71.

徳田克己・河内清彦 (1988) : 視覚障害児・者に対する態度の変容における大学の講義と接触経験の効果, 東京成徳社会研究, 1, 41-56.

徳田克己 (1990a) : 視覚障害者・児に対する一般人の態度を改善するための技法とその評価, 視覚障害教育・心理研究, 7(1・2).

徳田克己 (1990b) : 視覚障害者に対する態度変容技法の効果の持続性に関する研究(1) - 盲人の手引き法, 東京成徳短期大学紀要, 23, 119-122.

由良妙子 (1991) : 障害児に対する中学生の意識調査 - 交流教育と性差の視点から, 学芸, 37, 1-10.

江田裕介他(脚本) (1995) : 障害者といっしょに(全5巻), 汐文社.